

庭婦
訓女

冰
山
妹
脊
山

三



~ 13
3100
3



河へ13
号3100
巻3

珠秋妹脊山卷之三

江戸 振鷺亭 主人 著

長紙

第五
曲水の套
附 牽牛織女舞の事

さるる何と云ふ赤松譜代の忠臣石見太郎左衛門雅助太宰少貳嘉頼が
立母狭高ゆい、主君に家次婦とび真さんとの文望が公止共中秘計
成りあけく芳野殿ふ赤い奉仕忠勤致とん此音やけれハ王儀
どハおがしりゆくと甚とろこむせ給ひ昔漢の高祖を楚小娘とあは
韓信張良が將くと今赤松が雅助こそ慈ふとりて一方の力ハ
婦ながらも狭高又まよるれ時の憑ともハ紅ハ入るのよと
に流くは石見み谷山の城次あつハ給ハ石見とれ赤山脊山

昭和九年
七月三日
晴末

雅助とぞ名のり松高ハ又妹山の別荘を賜り日夜膝下は服
言ハ巧みヤテ王の御氣色ハ候まはる令色の
松高うぐてハ協ハまじれた体ハ籠遇しけれはふ二人と謀志を
ぬと喜ハ王の多ハ小耽りな勿ハ使とて美女ハナメ其女ハ可
内侍所ハ通ヤセ御鏡ハ棄とてハ計畧を豫も
近侍ハ召見日夜酒宴遊興ハばくされ驕奢遊遊ハ
もなかり時ハ上巳の節句ハ曲水の宴ハ促さるべしハ諸司百官
召侍して龍門の龍のほとりハ席次ハひけ終日酒宴と成し
も浮世の春氣ハ八重の霞ハもとたあて雲の間ハうらふる飛鳥

と蔚然とてハ山姫の布瀑りと云れりハ詩ハ賦ハ奇ハ縁ハ
ありハハ絲竹音楽ハ自修行花さる風月琴基書画とるぐなる
娯ハ人間の花街柳陌とけりハかなの天上の榮華も事ごとふり
やあふんその逸樂山海の珍物をけし酒の池内の林長日の娯
をも真つれと此ハハ艶ハ遊ハあふんとあハるハハ双六ハ勝
んりのあハおハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
おハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
の肌ハの香ハはハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
あハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
弄ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
野ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

松高

松高

松高

色を益とかやまひり皆ことゆたの嶋臺に遊々せよと宣へ日野
 有光公かざり餅の層の上お草の饒次かこひ桃の室に東のしじ
 小角お唇を御前に進すれば嶋臺なるに饒をさしめしつと王
 頭かかどむすなまひりの周の幽王淫乱はして宗廟にみまぐりし
 か群臣愁苦と耐曲水に宴の次或人饒次作りて幽王に獻る
 王の曰此餅流物なり宗廟に獻るべしとその後周の世に治りて
 遠く天下に致す後人相傳へ饒次作て三月二日に祖靈に進むと
 一節詠ふべし有り有光公の故事に我と幽王の淫乱
 しのんといふやとあはれおせよ有光公謹んで君はちと
 口をまじはしこの淫乱の御あそびは何ごとそ南朝の宗廟とを

らせ多ひ北朝に亡さるるおぼし君をなれぬやといひもをてさる
 お王勃然と忿らせしとひ玄とよ小ざりしに諫言ゆふおし人ら於るに
 やと旁に嶋臺をまつりて眉間へ礫と搏けけたる人の臺を微
 塵お指ちりしはも威猛なるに御幸す人小恐と人汗振る
 耐こそあれふしとやな芳野川の水上おあやしむるのこそ浮み出
 ぬ其ありはは芥山の方より容貌困雅なる美少年出現し王
 次欺くむかり金縷纈纈の粧風流をけりしはなからおとなむとこ
 の扮もく牛や牽天の河ととつた風情たりたれ又えとは妹山
 れ方よりも妖嬈嬋娟なる美女河面ふりかき出しが翠の山お月の出
 るもらうとれ女あり頭を金の笄玉の櫛に飾り身は後羅錦
 繡をほとひ綺羅のわたりお輝く七五采の機梭を織女の影向るを



三
四



トウの王
三
四

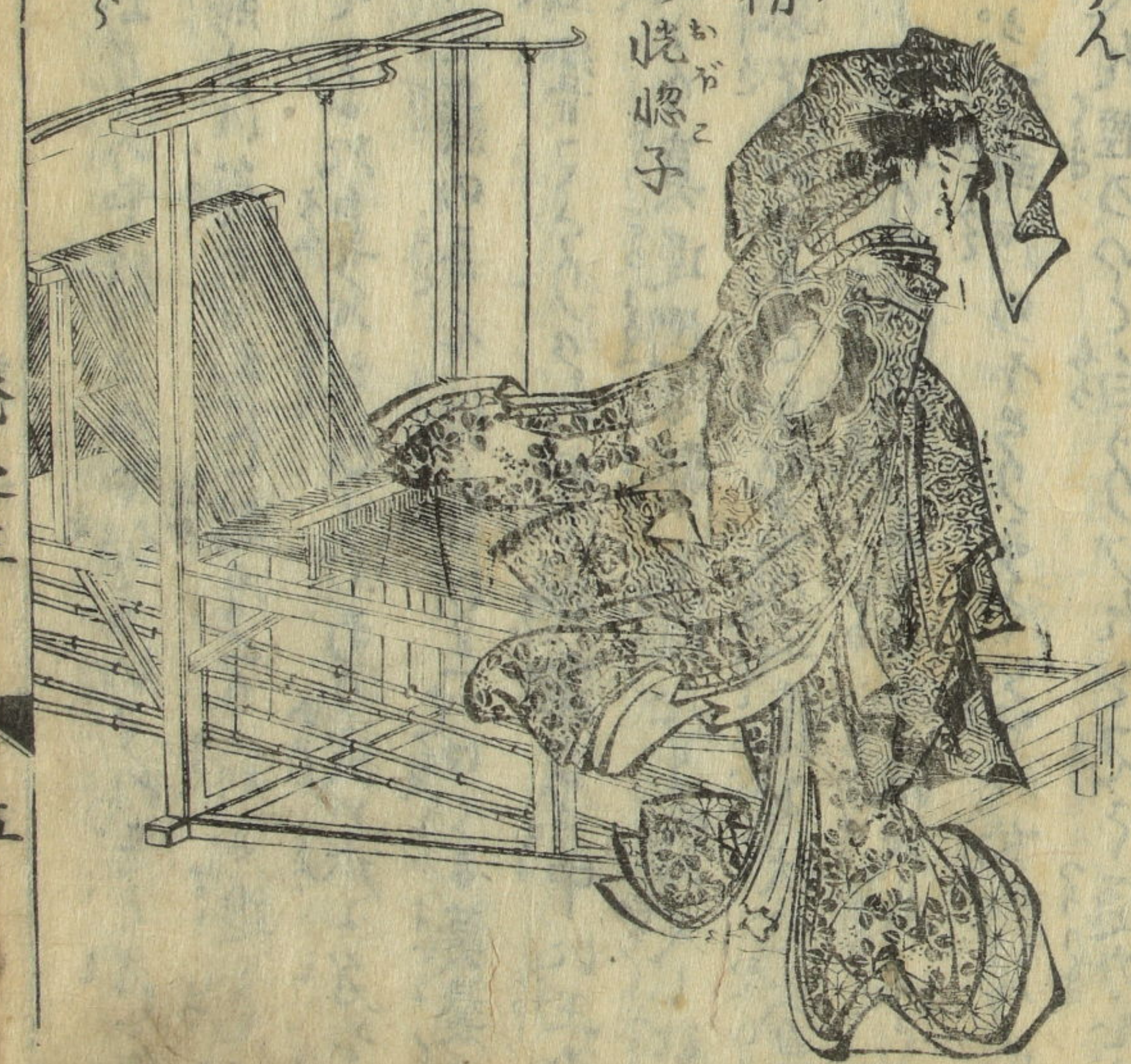
粧束あそびにえられ再妙なれ風情なりこのそもいふ
人扱木偶能いりなる機園なれらん
着々双方岸にたれ馬の橋のね

おもふのらくを法とるさかの沈上の
金蓮はあまの歩を蓮
着をせとてかやの形勢
あて徐らに歩こつ川の半歩
行進のめあせられ七夕はあひこ
ほりもりあそみに袖袂の繡の袂をひら
し紺袖の花袖をひらけはと係はして弄れ
彩雲の翠れ山嶺を廻れがごとく碧浪の倉濱にたづめあ



似り人い始より目とませと足といわれ天童と仙女
あまらうてか舞遊中らん
凡人あふいとるお性く
痴果に猶舞謡その
ほりの可愛と頻伽の初
音よりやにしく其風姿の洗惚子
さかふるたびとにまも
まへく笑を合し情お
りて名く初うへん湯て
唾ぬまがし鼻の孔へ杯を
行他の人お着ぬといふ

あまらうてか舞遊中らん
凡人あふいとるお性く
痴果に猶舞謡その
ほりの可愛と頻伽の初
音よりやにしく其風姿の洗惚子
さかふるたびとにまも
まへく笑を合し情お
りて名く初うへん湯て
唾ぬまがし鼻の孔へ杯を
行他の人お着ぬといふ



或ハ人の脊^せがさ^らた^るあ^まかり^うや^後う^とな^やほ^もい^まれ^どと^方と^あ
 諸^{しよ}卿^{けい}も^も冠^{かん}の^の落^おろ^くた^け知^しら^ずば^ば荷^にさ^りお^とし^し膝^{ひざ}ま^るり^前進^{しん}進^{しん}進^{しん}
 へ^ま松^{まつ}の^の木^きに^に頭^{あたま}を^を突^つめ^てま^るた^ら鼻^{はな}が^が打^うち^ひく^るあり^或ハ水^{みづ}を^を投^な
 又^{また}ハ石^{いし}を^を踏^ふく^もわ^りや^がて^責の^の弁^{べん}を^を淫^う弁^{べん}け^けは^はば^ばは^はく^く母^{はは}莫^も暴^{ぼう}々^々
 と^讀美^みし^てま^るく^く動^ど響^{きやう}こ^こり^りた^れか^く虚^{そら}露^ろる^る中^{ちゆう}に^に王^{わう}あ^つ
 と^叫聲^{せう}した^たひ^つ岩^{いわ}上^{の上}より^{より}真^ま逆^{さか}倒^{たお}れ^たと^墮た^れた^ら人^{ひと}い^ひ驚^{おど}る^る
 さ^さら^だて^てを^をせ^はど^ひ御^ご氣^き又^{また}い^う母^{はは}と^とら^かく^へハ^王覆^{おほ}ふ^伏て^大息^{いき}
 は^はが^せく^くあ^ひむ^じ又^{また}采^{さい}と^とら^ふり^の此^{こゝ}龍^{りゆう}門^{もん}ふ^菴了^法行^{ぎやう}く^く
 と^うり^り空^{そら}ふ^飛行^{ひやう}し^けれ^が吉^{きち}野^の河^がの^のや^さり^り母^{はは}く^く若^{わか}れ^た女^{によ}の^のい^わく^く
 死^しつ^襦袢^{たん}が^寒く^衣洗^{せん}へ^れ脛^{すね}の^のい^と白^{しろ}り^けれ^を見^みる^通力^{りき}を^をし^し
 い^ひ空^{そら}より^{より}落^おち^ぬと^とま^けを^を我^{われ}も^も又^{また}か^かの^英人^{じん}が^堪能^{のう}の^弁ふ^うか^ま
 ぞ^ぞえ^へとも^も墮^おろ^ろる^るら^りあ^らむ^心を^をう^うけ^ける^おと^宣へ^人の^の恩^{おん}係^{けい}
 て^丑和^わ盲^{もう}目^めに^いら^らむ^やた^まひ^いら^らむ^{して}御^ご目^めふ^とり^りや^と候^{こう}を^を王^{わう}
 ろ^ろく^くと^咲せ^くま^ひ二^に人^{にん}の^の妓^ぎ調^{てう}子^しと^との^のへ^微妙^{めう}の^の音^{おん}が^そろ^へ今^{いま}
 様^{さま}を^を遙^{とほ}く^く我^{われ}神^{かみ}通^{とう}力^{りき}の^の耳^{みみ}ふ^入天^{てん}眼^{がん}通^{とう}の^の目^めに^に見^みて^あぢ^ぢや^り
 も^も遮^{しや}一^{いつ}牽^{けん}牛^{ぎゆう}織^お女^{によ}の^の舞^まの^の風^{ふう}流^{りゆう}い^と妙^{めう}なり^{とも}流^りし^{とも}見^みも
 ず^ずも^も飽^あを^をし^{とも}ぞ^ぞえ^へむ^むい^それ^かの^の美^び童^{どう}い^ま女^{によ}が^召ま^れよ^と仰^{おほ}
 す^すれ^れあ^あ人^{ひと}の^の嘆^{なげ}を^をい^はな^せは^じと^おり^の所^{ところ}ふ^大判^{はん}事^じ狭^{せう}高^{かう}ひ^とし^く進^{しん}
 出^いで^いあ^あう^はく^あん^が沼^{ぬま}邊^へり^とて^まり^れ只^{ただ}今^{いま}い^まや^うと^奏し^し
 我^{われ}が^一子^こ古^こ雅^や輔^ほ離^り鳥^{とり}と^や者^{もの}あ^ての^のか^今日^{にち}君^{きみ}が^御提^{てい}ふ^何が^な
 真^まん^がと^とく^くて^まり^んと^二人^{にん}の^のつ^らむ^をあ^ぢぢ^ぢみ^微造^{ぞう}し^くり^木偶^ぐの^のこ^と
 ら^られ^を敷^{しき}見^みる^そろ^ろと^愚案^{あん}が^あぢ^ぢし^則芳^{ほう}井^い川^{がわ}を^を銀^{ぎん}河^がふ^見し^て

いせせ山
 卷之三
 一六

七夕のあふせも枝を梶の葉にかくばるる花の代の大嶋臺とておれ
 してまのね終るよ我王のいともかゝる歡感あめづる奉るも
 我の子守が身おとりて冥加や思ありと言ふそへく暢きれむ
 いとうるいじうるべし師すま何みく損くならすら眉を利鬼給ひ
 あふいこもこころ你言巧み二がれ者とんえそれとも実ハ北方
 の者ともめてこころ我を想ふ間者うらびや謡曲の節ふ美色と
 ともめて我心を櫻一隨弱の君とよとる謀と我推測古故
 はよつるさ由して你望が心を探りぬ是めて思ひあはれるハ既小二星
 川をいつるの機園あり財今南北とこられていかなる反間の者あ人も
 知とん玄蕃左派太右衛門を以て芳井川の波を撿め根不通路
 成ゆるいん小巻の網鴨舟の類すても止よと直へハ大判事狭き

くらと懼る、御前ふらぐくまうりこゝろひりあけぬさやもうなはれ
 方の間者なりと思へるどんあつらうか説るさも聞るはじられ
 ばいざや首が切れて心疑をともさせと多くと領首搔るぞひろい
 び王ややくは氣を移すだりやとよ你言日ごろ忠勤台りやとせ
 れ事もなれ小強く狐疑すれハ賢王あはれ縦令北朝の間者小
 もせよ何程のさやあらん我一天四海を一呑の心おさめて寛仁大
 度答へたびるん者を雛鳥古雅輔をアけて人質としつら言意は
 ひなの雲の上かられ花とながめいさういふお背つるが落る微塵涼山
 ころお吹教責職おなしられん其言子守も叮囑さや将ぞ
 むれさうと火急の麟言汗の如く背ふのぼして大判事狭き
 とも勅命がこもてこも退出を已ふ春の長日も西山お傾

なるに不ぞもあはじとやづて王と還幸あり大判子杖高とあ
 まて是より王の邪智のほども骨隨子徹して怖しく必死の際
 一かとも又も究れ我子等がどひやうに歩む難所をゆく心地
 前るがごとくあひとるし空み知られぬ花曇足の踏所もさこの
 わらざ快々として相別道各々館み飯りたれ

第六
 妹山の套
 狭高離鳥負烈の事

千早振神代の山に大名持すぐなれ神のはと道し妹脊の山に
 方野郡あり東ふとらて龍門の方にある妹山といひ西ふとら
 て飯見の方にある妹脊山といふ其高きば川を隔てて
 山向へて其山の間に流るる芳野河の詠なれば景色し

ぐらうに地なりけり脊山の大判事雅助の居城あり妹山に
 太宰少貳嘉頼の妾杖高が賜に設けりたれそもく西家相
 て河辺のうごらうたれ芝生の山に上り遠り懸て樓の館あり
 水に臨み眺むとしてうごらうたれよく涼くして聲をたせよせよしの川
 此のうご庭前の泉水とせよる比も涼生とせよるさ此橋上
 より観らるるせば満山の櫻一目あうて爛熳すれよ本の橋日本
 か花侍の花苑山伏む橋田の谷峯に花盛名はしあふ芳野の
 山地庭相の気山とならて眼を遠くびとりのうごらうたれ
 向ひに隣家の因われども此とら川幅闊くは双方の去
 こころ遠く常へのりも年も跡あり右雅輔離鳥籠の父母
 縁成契て夫妻の言号せしめば共其心の誓ひとるし館も此異

とうろれずめど境の河ふゆれ連理の枝は交へるがも年々
 一どのの夜の夜を憂年月の流るゝ妹脊の山れ中に着るよ
 の川のよもやせもさひも思わぬ心ありしはくくも父母の命を
 て相互もよりの河のあふ瀬うれく幸牛織女の絶ぬ盟を
 ながるゝふ回もゆく河に双方館も飯りけりまごあふふりかこ
 糸のゆとりとあられれ想なりきり古雅輔の日記は和漢の書
 眼をさすせに我房の亭に茂筆文れよ告北よ余所目もまご
 勤字れ困もも堅し力も付もこそめれ芬郁は花の香
 春風は薫は黄鳥一羽花をくろの梢の梢も彷彿とし百啼乃
 妙音は啼はくも古雅輔の堪くと耳は洗ひ心を清くそ
 ろのやうまはるゝの初音は告るとせりひふとや老をなくあそ

あり我父も老鷲の故巢よ還れ齡もあまをもあまねるが
 其子として徒お春の行清も知れぬ間もくもよとゆと給る
 いと悔きれりみありしかくもくも成長艱育の忍もあけぬへ
 おだもあまり武士の子とれりの心もくも何として芳野殿も
 了羽を拙く内侍所をまふ入ると北朝は進くとれは再び主君
 の家も真一父がまふ懐も遠く忠孝一ツがくも全うらんさくれ老
 夢は啼はるゝの悪飲と心の笠ト父の行末我身めらく思ひ
 中より射しもあかの黄鳥は去るはて又一時音は啼みまきて
 を法華経の妙音は告るゝの佛神の加護は憑との示るゝ
 ちりての易かれは変北と観るゝの意も少一瓣の香を拈て
 小多武峯乃めたはれ拜くとくれ大職冠鎌足公の忠良の烈

人^{ひと}はしはせが^{わが}天^{あま}驗^{あきら}などし^しさし^さく^くと^と日^ひと^と念^{ねん}奉^{ほう}る^る忠^{ちゆう}孝^{かう}
 の志^{こころざし}と^と敗^く心^{こころ}せ^せし^しむ^むひ^ひ今^{いま}ら^らに^に北^{きた}朝^{あさ}の^の聖^{せい}運^{うん}め^めて^てと^と父^{ちち}が^が忠^{ちゆう}信^{しん}
 う^う吉^{きち}兆^{ちゆう}なり^{なり}ん^ん此^{こゝ}る^る北^{きた}に^に飛^とせ^せり^り又^{また}南^{なん}朝^{あさ}の^の王^{わう}位^いは^はよく^{よく}父^{ちち}子^こ
 う^う志^{こころざし}預^よじ^じる^るし^しり^りに^に凶^{きよく}地^ちなり^{なり}ん^ん此^{こゝ}鳥^{とり}南^{なん}に^に飛^とせ^せり^り又^{また}南^{なん}朝^{あさ}の^の王^{わう}位^いは^はよく^{よく}父^{ちち}子^こ
 も^も法^{ほふ}華^か經^{きやう}の^の普^ふ門^{もん}品^{ひん}に^に續^つ誦^{じゆ}せ^せり^りも^も諸^{しよ}鳥^{とり}引^ひ張^{ちやう}の^の大^{だい}業^{ぎやう}
 経^{きやう}を^を説^とふ^ふや^やあり^りん^ん此^{こゝ}黄^{わう}鳥^{きう}三^{さん}過^か羽^うに^に抑^{おさ}て^て拜^{はい}翔^{しやう}の^の粧^まを^をな^なし^し北^{きた}に^に
 方^{かた}成^{なり}差^さと^と飛^と去^さた^たれ^れん^ん新^{あらた}ら^らし^し瑞^{みづ}祖^そ不^ふ思^し議^ぎ多^たし^し車^{くるま}ご^ごも^もなり^り
 古^こ雅^や輔^ほ睫^{せつ}に^に凝^こり^りを^を流^{なが}し^して^て北^{きた}に^に飛^と法^{ほふ}し^しに^に我^{われ}神^{かみ}室^{むろ}と^とぞ
 得^え北^{きた}朝^{あさ}に^にや^やなり^りん^ん所^{ところ}願^{ねん}成^{なり}就^{じゆ}の^の詫^わ宣^{のたま}ひ^ひる^るう^う好^{この}と^と感^{かん}淚^{なみだ}肝^{かん}は^は路^ろ
 け^け二^{ふた}拜^{はい}九^く降^{かう}た^たに^には^はれ^れり^りも^も風^{かぜ}か^かり^りて^てら^らる^る琴^{こと}の^の音^ねゆ^ゆは^はそ^その^の声^{こゑ}
 嬌^{せう}々^々と^とし^しこ^こう^うと^と寄^より^りて^て流^{なが}水^{みづ}の^の曲^{まが}を^を調^{たう}へ^へり^りも^もあ^あぞ^ぞ誰^{たれ}か^かと^と人^{ひと}と^と摺^{すり}

行^いつ^つ端^{たん}ら^らく^く足^{あし}な^なれ^れば^ば妹^{いも}山^{やま}の^の樓^{たう}め^めと^と離^りる^るが^がか^かと^とあ^あら^らん^ん玉^{たま}琴^{こと}
 のと^{のと}唄^{うた}の^の風^{かぜ}情^{なさけ}を^をら^らる^るも^もえ^えへ^へり^りん^ん此^{こゝ}日^ひら^らら^らる^るに^に橋^{はし}の^の
 方^{かた}と^とあ^あけ^けて^て離^り遊^{ゆう}を^をい^いと^とな^なて^て侍^{さむらい}を^を飾^{かざ}り^りて^て金^{かね}玉^{たま}と^と粧^まし^しる^る
 目^めぞ^ぞえ^えし^しも^も又^{また}氣^きな^なり^り侍^{さむらい}女^{むすめ}の^の節^{せう}句^くの^のこ^こと^とふ^ふれ^れも^も白^{しろ}雪^{ゆき}の^の
 酒^{さけ}は^は碎^{くだ}面^{めん}と^と桃^{もも}花^{はな}よ^より^りも^も尚^{なほ}ら^られ^れる^るい^いも^もそ^その^のゆ^ゆめ^めに^に酔^よめ^め春^{はる}風^{かぜ}
 ふ^ふ吹^ふき^きつ^つも^も端^{たん}居^いに^に遠^{とほ}眼^{めがね}鏡^{かがみ}に^に覗^{のぞ}き^きて^て我^{われ}を^をえ^えり^り嘆^{なげ}ひ^ひ現^{げん}當^{たう}確^{かく}ふ
 ぞ^ぞ古^こ雅^や輔^ほの^のか^から^らに^に撫^な行^{かう}に^に侍^{さむらい}と^と自^{こゝろ}若^{わか}ら^らる^るか^かく^くと^とえ^えて^て侍^{さむらい}女^{むすめ}乃^の小^こ葉^は
 拮^こ摺^{すり}は^はひ^ひう^うひ^ひや^やよ^よく^く芥^せ山^{さん}の^の雅^や君^{きみ}の^の何^{なに}を^をか^かお^おり^りの^のお^おり^りし^しれ^れ侍^{さむらい}頼^{たの}
 う^うら^らあ^あり^り玲^{れい}々^々御^ごめ^めの^のい^いり^りく^くし^しさ^さよ^よか^から^らり^りあ^あら^らぬ^ぬ尙^{じやう}芳^{ほう}野^のの^の花^{はな}
 も^ももの^{もの}う^うら^らと^と戯^{あそ}ぶ^ぶい^いん^んが^が拮^こ摺^{すり}な^なら^らば^ばも^もや^や我^{われ}雅^や君^{きみ}と^とい^いは^はし^しと^とあ^あり^り
 か^かく^くし^しれ^れ妹^{いも}と^と脊^せの^の御^ご緑^{りよく}に^に併^ひひ^ひ侍^{さむらい}坐^まら^らば^ば一^{ひと}対^{たい}の^の離^りと^とや^やえ^え

高城の神さうねども山岩橋のつらりもかなとありあそよのさや
石かきくしせたまの事こそあつたもせめて遠眼鏡めく君の
笑とみそつらせたま人やと奥のまめれく磅といふあそ雑鳥慧
うれたたれんか推沈いう舟面をえればとこ目鏡お君か視共
私屏ん戯とるのこづりやうあぞら進した十々の達瀬間もなく
引これ懸願の糸とれく赤の心れむとあめは遠境もなとこ我
おひ親と親との昔よりかこらひしあふ中ならぬ妹脊の川よ
隔られ言の家かこを事え人もあつたね縁一のまめれくは遊しめじ
れ我夫と此山の彼方あそ霞の空とるむうり天の河東ゆあそ
かこそ鶴の指もめれもろりもやうね我涙吉井の川のはしとらぬ妹
脊の山は中舟流とらうせとるさもいとあはし今あつて思れど

世の分野の為情やと切りれかりひ撥詢臥況とれかなしとら連歎
より遠面けり侍女多其ころ海に慰りころの理りなれあめせや
なのの親上のゆるさせ給私のかうひあつたねの何えらほじかろ
がたぞこ海もあつたさそとつた等の通路あそせとせとやぐ
料紙を近れ小雛鳥もづもかか母入のゆほしもあねの中垣
越れしりめざれいさばら事あもあじをと硯川あこころの
奥山よほまころ鹿の巻筆もあめめれ玉章の城と国を
倡これ入進らせよとこことれが拮校奥りてはけりしかとあふ
のなやめれるありの所所よりれ命めく柙渡櫻渡もかこ
通路を禁あつて蠲符なつとが通とと舟筏入候されがらじ
くつりよわらせん入中りあつた消息のほく我くがらのちが弄



いせし
巻十三
十一

歩行こころせば道流なりとも渉らるこころよもあじ瀬と踏
こころく入むやとしくを小葉咲くころ奥もなやこの谷川の瀧
津渡よりた名流とのとさるべはうれ同母紀の浦へあがるとて
海の薄層となりやせん危れことを擲く我おがぬを玉草や小
石も指属力やまがりめて地中へは便を松浦佐用媛の石よなり
ともおほしりぬ姫君の念力もく恋し小石れ彼山よさるたもせぬ
としく離鳥微晒あううや此曠と一旦ぬいりて越らんさるたも遣ぬ
のみがらるる石を沈と密書はるるれくじしも人の目も觸らぬが
うけさるる災ぞしよ念力のさくとも礫やうつハ唐突あり
さりととも又いふせむやと見れらるる瀧瀬もさるたも味脊
門おさるるねるる公地と頃之想ひ懐く一があり在せ

男蝶の瓶子や佐えこころあき吾ありひ寄ありえよやと件ハ
女蝶の折敷もくなむとけ五葉の糸や属玉草やくつてとく
このより形や風筆と耐し東風吹退風よけれハ風れ侍は
進みせんハいふもやうにとしくも小葉拵投諸手を指らる得
もくね御工風筆のいとく感もさるすれ然る気もさるの使
ハ昔お語ももとも同も遠とと瀆る河もさるめれたらうとや
と姫や終きも樓の端母紀出風日靡せ揚りし風筆のいとあ
さうと風情うお採つ境川曳はとれハ雲井違ハ并昇り霞
かくしと小さくおり八重立奈の白雲やうり出とさるの岸ハ
ふ天さるる胡蝶の儂背山の上も翻々なり此耐古雅轉々
廓や伴かこれ光景やえくころあらうにありあやうとも風筆

えんてきさ
 と韓信敵陣の遠近を討らんたりゆゆ
 筆次玩弄あま深れ趣あまらんぞ釣おとせんやと文鎮と
 重石とし鼓の紋を属をりよく風箏の撓しやんぞほし
 と拙かけし誤と系ふかすすらくと襦の袖も落し難
 取あきてそくたれを風箏の一紙の書やうてそ人我名宛
 異織なく即披覽是が其文おし

とそ急然ぬより舟れ川の水澄や妹脊の山れ中きく
 いのほりの風乃ほけてゆまうしおろもわらせねそもく
 君と我とあ加と耐父母の契物ありと妹と脊乃中号あり
 よし却とひとなるね親族の因世しはれが裏なく密事を
 吉りわたりとれも今度吾倫苦野の河新もよわて官仕

ほかよりとれと流るゝむとへ内侍所の御鏡がとりぬるふ
 わり足り振かぬ大事なれがりいづなれ妻も値今
 世次ふせはれとも我身を君父のそあ惜うと縁の思の好
 縁し何れさより迎へさせたまももきこしも怨りあする
 へのふびとそれ幸牛織女は怨ぬ誓いしやう空し
 なしゆるといふ金銀惜くははさうりそめんど二星相あ
 と列るあ始とみやあならせの胡蝶乃夢よりやと世
 乃川もよ敷く花と流させきる人あましくなれ言乃
 ちかまかまうなれ妹がのさぶらぶがからしや書と
 充賢

浪々王仕へ身命を抛く囚付所より囚人とす我の忠告全
 れ志は貴きも耐えり鶯の使小艶書はかつると女子こ
 れのの習がるにいと戀慕は伴や断く我送をも譯けり天晴
 女中の俊傑類稀なれ女子うたと心中あつりに感歎せしごと
 おりうし我も君父のま芳野殿仕へ神鏡をとら奉らんとい
 へる男子の身りれ囚付所は近寄かき離鳥といり忠告は
 旗とて我がてあらん囚りつせし俾かれ使の共ふ大威討
 れへしとありは折し且そのさめと探えんと書は志と見え様の
 稍け一掃を折り其枝は件の密書は扇又文管の環とあり
 つかの風箏は糸を通しはらり枝をうらてそ人頭は挿して
 揚しは風情なりつね分野なり妹山めを離鳥遣ひこの種と見

と其ころ夜々曉アさりりより赤次撮く起對心その糸川の
 上は以往那邊より引えり尚躬を低されは彼所もくはさし
 月ら高きより低れよとされと遠かれともかみ誘は春風は後
 枝のゆかりははば環とらしくとふとせしアそく忽ち歌を
 てみりともそ到ぬ離鳥堂は受とられ密書をめり小糸
 指挿とかくとも知れは彼君よりの御書をばささなるに
 かみゆりそしごとく枝とせし人やしわのめりりつて皺も座
 と避させぬんとありいつとよ覽ふ奉のほししを你達
 と樓下く我息を付さしといく我くもこのみははらませ冷
 こころやめははあらはまよふと小糸桔梗艷然とくちゆれ
 るり村に離鳥に迎へて困ひく古雅輔が密書はゆりたるを

其又みしりく

あみせの懸るるははりしせけりも妹脊の山の中級て
 芳野乃山のりや高と君父ぬ一れ恩も教ゆるん
 御志空も世小難遭感涙袖以絞るもかんせん男
 こもまかくこそあふまほしくおけりもあつり古雅輔の
 及もはりしせぬ事なづり我も忠孝の道るもはしく
 其の芳野殿もあつり密事な討ん志は義は笑
 て金石が盟相鳥小天罪起請文取換ゆるん覆回の
 こそぐも妹脊の山の中乃繼は悲心塞とけりあふり
 一をとりぬりゆ件
 と書ふしや離鳥よみあつりて懐裏も捲収長沈吟せり離の

前ふ對ひて警言でしらくとも離遊の事日本紀みん和珥
 坂の小女が故事より始り又清少納言枕の草紙よむなるの
 調度といひ源氏乃がづりも十おあつりぬれ人の離遊ハ心ん
 花のをとりつぎ是凶事な獲のそあへりや今我乃のそん凶
 事ッ吉なり知福も忠孝のその乃おまの命を憐ませ擁
 護の力なそん多ひ神鏡我も授ゆるは是ぞ女人とる護
 の神ありと信受作禮しりカーセーが又はるく四近と願ひは
 起りて言吾儂女人とんをれハ大なれ偽あも此乃真を
 男子なり故ありて幼穉より女子の次女お造りしハ母が秘安山の謀
 あも侍女もあもん知事しとより川女子の扱も殿ひ故嘉古雅
 輔ふかへりも戀慕の情乃罪ぬく実女子とんをるるあ

のこりりしかどうで密なれ我々のうへ今此席も知るものなく
 離のみ知れぬされども此神妙の玄策かゝるに人ふ世に給ふ
 り母の忠信我孝公愍こゝろと禱し只是一公の凝ととも正
 小神子通じられぬやありんやあしくさほじりその母への孝公
 離とてなごう感應あはれんといふ声一はふせゆとばさう
 と離る駭さて四下みえほど人もなしさて離のいのひ
 なまうひ一飲こい不審と愕然とせぬゆくりなくも綺帳の陰
 より母の狭高起出しかの奥傭しも柳の節句のこゝろを
 さらりきなく暢けて母もらるるに答へ膝近く坐せしが
 夢を側ともやそも孝心のねと綺帳のかきみき笑へて
 我ら世にこの詞おあまりのいふにせぬ涙を袖にけりみく

居よりしそや御身稚より女児の姿おはるはし生育ぬま
 ば自然と女子の風俗移天性如法の眞實あま眉目容
 やはしく誰う男子とつるりの形くまの日にて冊の女原え
 知づりし懐ぬれた身が行跡りとあま母が詞守金石より
 も尚固その孝心の神意あな離も應受さこそあはせ給ふ
 らもさるあても御身は女子お作しおまはれハ世に潜御在構
 姫の御身母代耐の難や晩んりひての計なりしうと嬉慈燈
 此玉御身は此夜もあめてなまうひと急ご存せよあまのりなびり
 もかた茶花いなめは罪お行りまき今も男子の本性
 露に古稚輔と名のり芳世殿あまのり内侍所計は母へ
 の孝といふもさう太宰の家は天か下に双た功績

ぞうしいがやいりかと同けは離鳥やうて答るるやうあつせを
 もかや御鏡取てまろたの素より情願あていりまら道
 たりとも云なうら今古雅輔も換て男子となりて内侍所小
 近寄かじ只此まにりりまても女子の操以経緯古雅輔へ負
 女代はくし倍芝るびうぬ風小破かや仇ある嵐よ吹らうま
 身と碎粉ふかりれまても女子となりて果るこそ始終全を
 謀あくゆらんむりひ寃し吾侮がうろ活へかくと護力以抽りり
 女離とりり首がらうらと撃おとせり必死と寃一覚悟の形勢
 狭高感涙せとあへど誓もあつた女離の首古雅輔へ送り其
 貞節の赤心をわらじなんと小葉桔梗呼云云おせよこのあ
 すとは血ありてそのいとかなみ嫁しては再飯もざれ姻嫁の首途

次学あひ繪行巻を首桶小擬と首次おとち離の轎子も捨り
 入つ玉琴以舟と鳥かかの風箏れ糸以属の正ふこれ赤繩
 の繫おれまらんかて妹脊の川ふりうめしう様かりこの木がこ
 と母誰う曳らん尻琴れ流る水と撲ふうら向ひの岸へ中
 かこのんゆい

妹脊山卷之三

いもせ山

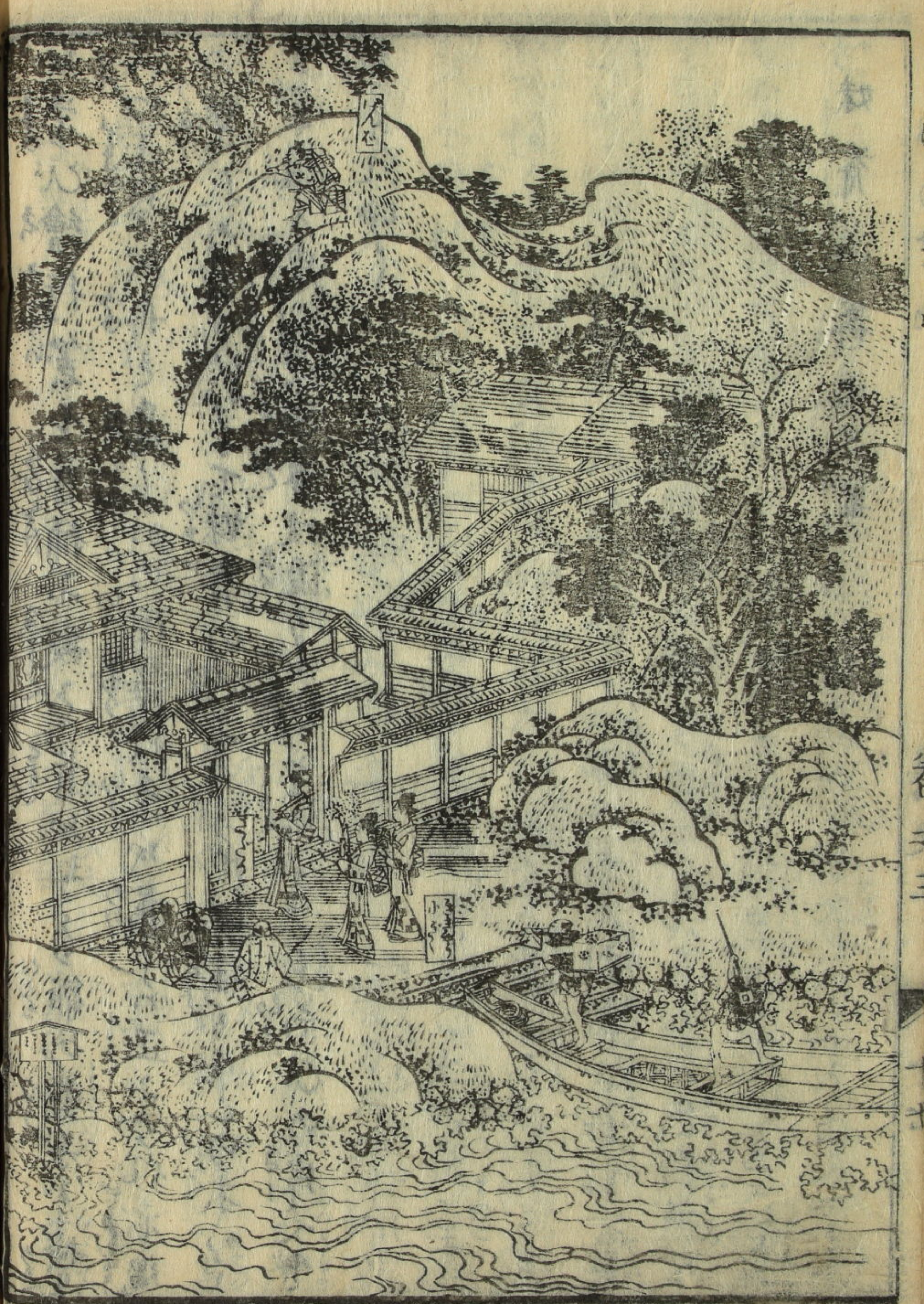
卷之三

十六



山
景
一

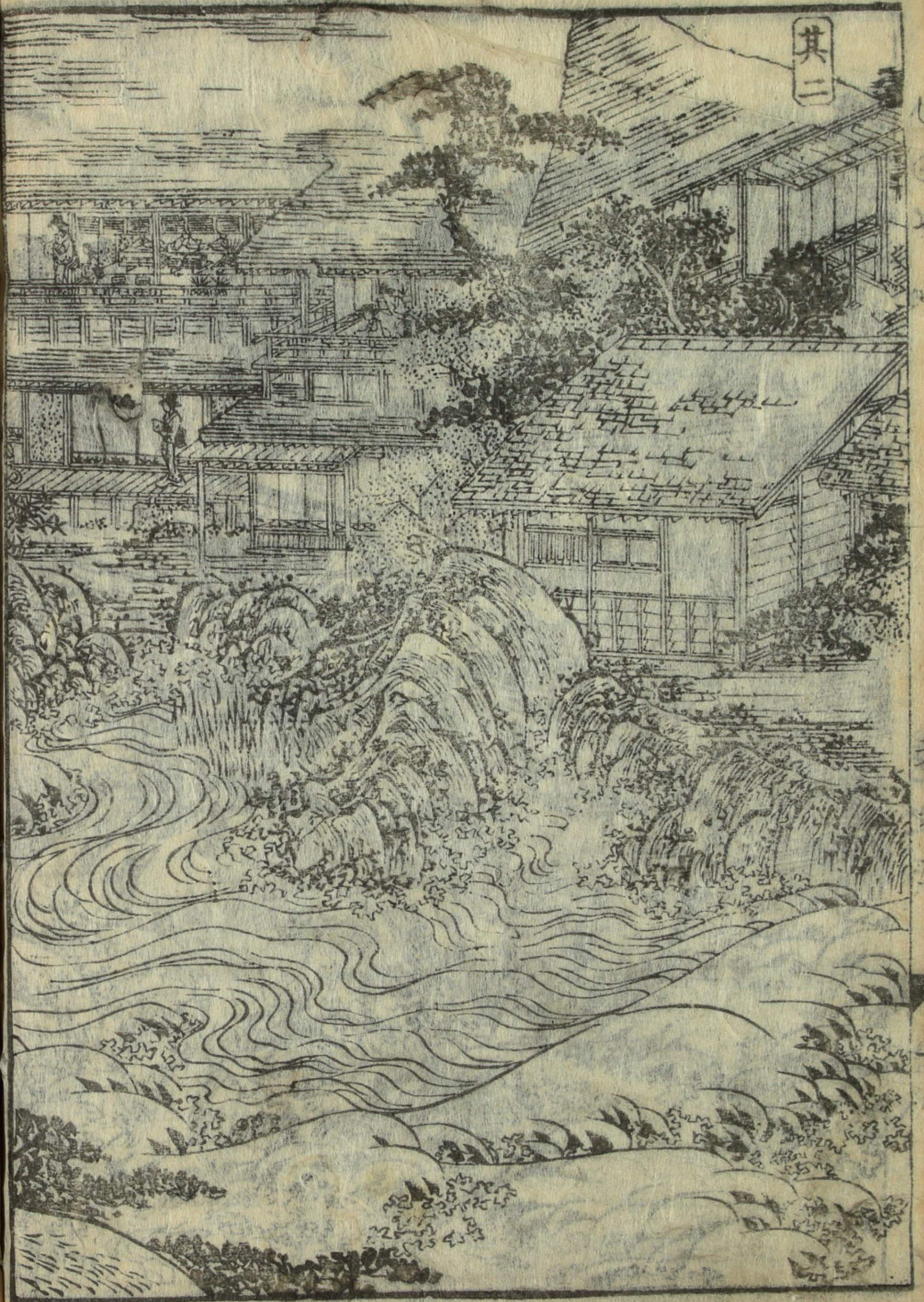
山
景
二



山
景
三

山
景
四

山
景
五

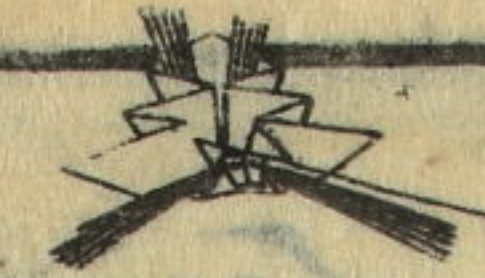


其三

しもやま

巻之三

十九



そのま

ななむく空の

まき風の

あそびとるま

あすむたの

妹山狭高

三全終

